

東京大学教養学部 主題科目 全学自由研究ゼミナール

こまとちゃんゼミナール

～ 駒場図書館で学ぶ大学生の為の情報検索・収集・発信スキル

2023年度Sセメスター 成果発表冊子

「こまとちゃんゼミナール」

2023年度S Semester 成果発表冊子

目次

「こまとちゃんゼミナール」とは？ / 本冊子について	1
2023年度S Semester 授業プログラム	2
展示会場風景	3
<hr/>	
教養とは何か？	4
いま、震災を考える	7
芸術、文化の化学反応	10
若年層の言語習得	13

「こまとちゃんゼミナール」とは？

「こまとちゃんゼミナール～駒場図書館で学ぶ大学生の為の情報検索・収集・発信スキル」は、教養学部生のホームライブラリーである駒場図書館を活用しながら、大学での学習、研究はもちろん社会に出てからも役に立つ情報の検索収集、そして活用の技術を身に付けるための授業です。駒場図書館、総合図書館、そして情報基盤課学術情報チーム等、多くの方々の協力のもとに実施されております。

学期の後半では情報活用・発信実習として、また図書館と学生の協働の試みとして、駒場図書館の展示スペースをお借りして、展示企画の制作を行っています。

参考URL

<http://www.sr.komex.c.u-tokyo.ac.jp/courses/library/>

本冊子について

本冊子は、2023年度S Semester授業の成果発表として、東京大学駒場図書館にて2023年7月13日から8月2日まで開催されたパネル展示の内容をまとめたものです。チーム毎にテーマを設定し、駒場図書館所蔵資料を中心に関連する資料を収集して、紹介文の執筆、展示パネルの作成を行いました。テーマは受講生の関心に沿って多岐にわたっています。駒場図書館の所蔵資料について知るのももちろんのこと、図書館と学生の協働について考える機会となれば幸いです。

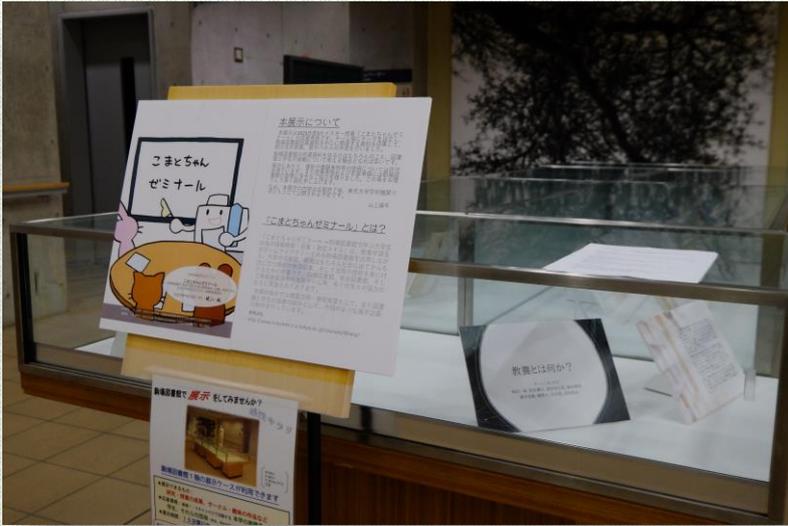
展示および冊子作成にあたり、書影等の使用については許可を得ています。また展示会の実施および準備には駒場図書館の皆様にも多大なご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

担当教員 山上揚平

2023年度S Semester 授業プログラム

回・日程	内容
第1回 (4/6)	ガイダンスと導入講義 (オンライン)
第2回 (4/13)	図書館の資料を知る
第3回 (4/20)	図書・雑誌の探し方
第4回 (4/27)	データベースの活用① (講義)
第5回 (5/11)	データベースの活用② (実習)
第6回 (5/18)	レファレンスサービスについて (講義・ワークショップ)
第7回 (5/25)	資料の探し方 (総括)
第8回 (6/8)	駒場図書館バックヤードツアー
第9回 (6/15)	情報活用・発信実習① (チーム決め、テーマ設定)
第10回 (6/22)	本郷総合図書館ツアー
第11回 (6/29)	情報活用・発信実習② (展示に向けた準備作業)
第12回 (7/6)	情報活用・発信実習③ (パネル制作)
第13回 (7/13)	情報活用・発信実習④ (最終プレゼンテーション/展示会場設営作業)

— 展示会場風景 —



教養とは何か？

チームこまっけろ

梅田一真、坂本優月、富安祥太郎、畑中愛梨、
藤井悠貴、黛晴子、吉田葵、吉田美涼

ここ前期「教養」学部で日々勉学に勤しみ程々に怠ける学生の皆様、そもそも「教養」って何のことだかご存じですか？月曜日は脳科学と文学、火曜日は法学と社会学、種々多様な知を曖昧に試みして回るのは何だか楽しいけど、看板に掲げられた肝心の「教養」については結局うまく掴みきれないまま……。そんな健気で可哀想なあなたのために、私たちこまっけろチームが「教養」、そして「リベラルアーツ」を知る珠玉の4冊をご紹介します。

「教養」の本来の意味を深く探る『これが「教養」だ』に始まり、リベラルアーツの歴史を古代ギリシア・ローマの時代から追う『リベラル・アーツとは何か その歴史的系譜』。そして、大学でリベラルアーツ教育を担う専門家たちによる『とがったリーダーを育てる一東工大「リベラルアーツ教育」10年の軌跡』、最後には教養を実践的に身につけられる『1日1ページ、読むだけで身につく世界の教養 365』まで。

4冊全ての書評を読み終えて気になる1冊をマークした頃には、「教養って何だろう？」というモヤモヤを解く確かな足掛かりを掴めているはず。せっかく教養学部に入ったのに、「教養」を知らないなんて勿体無い！ 広く深い教養の世界へようこそ！

文責：黛晴子



①清水真木『これが「教養」だ』新潮新書 2010年

教養主義、教養学部、身につけるべき教養、教養のあるひと、「教養」という言葉は多くの場面で使われていますが、その意味を明確に説明できる人は少ないのではないのでしょうか？

この本は教養という語の本来の意味を、それが生み出されるに至った18世紀のヨーロッパの社会状況から説明しようと試みる本です。

比較的冒頭で述べられているのでネタバレしてしましますが、この本において教養という語の本来の意味は「公共圏と私生活圏を統合する生活の能力」であると定義されています。そこからどのような変化を経て現在の古典の知識なども含む多義的な教養という語が生まれてきたのか。この本はその歴史的な経緯にも焦点を当てています。

今まさに「教養教育」を受けている人も、受けてきた人も、これから受ける人も、この本を読むことでその意義をもう一度見つめなおすきっかけになるのではないのでしょうか？

文責：梅田一真

②大口邦雄『リベラル・アーツとは何か その歴史的系譜』さんこう社 2014年

リベラル・アーツって最近よく聞くけど、一体いつ、どのように生まれたものなのだろう？本書はそんな疑問に答えてくれるリベラル・アーツの「手引書(p.2)」です。

第一部では、古代ギリシア・ローマに端を発し「アルテス・リベラーレス」と呼ばれた教育理念が、自由七科として体系化されて中世ヨーロッパに引き継がれ、近代思想の影響を受けながら今日の「リベラル・アーツ」に至るまでの系譜を扱っています。現在のリベラル・アーツがいかに多くの偉人たちの議論を経て誕生したのかにも注目です。

第二部では、日本においてリベラル・アーツがどのように受容されてきたのかを紐解いていきます。特に、東京大学におけるリベラル・アーツを主題とした第十三章は、東大生の皆さん必読です。

複数の大学で学長を務めるなど大学教育に深く携わってきた著者が、複雑なリベラル・アーツの起源を一つ一つ丁寧に掘り下げた、読み応え抜群の一冊です。

文責：坂本優月

③池上彰、上田紀行、伊藤亜紗 『とがったリーダーを育てる—東 工大「リベラルアーツ教育」10年 の軌跡』中公新書ラクレ 2021 年

「リベラルアーツ教育」と聞くと東京大学の教養学部を想像しがちですが、他にもさまざまな大学がリベラルアーツ教育に取り組んでいることをご存知ですか？東京工業大学もその一つです。2011年のリベラルアーツセンター設立以降、理工系大学でありながら人文学や芸術、社会科学を含む幅広い分野の教育に力を入れていることで注目を集めています。

本書は、東工大でリベラルアーツ教育に関わってきた3人の経験談と鼎談が収められた一冊です。著者の1人である池上彰氏は、教養とは「バラバラな知識を運用する力(p.18)」であると述べています。そして、東日本大震災やコロナ禍といった危機に立ち向かうには、文系・理系の枠を越えて知識をつなげることができるリーダーが必要であるといっています。

また、同じく著者である上田紀行氏によると、リベラルアーツとはその名の通り「人間を自由にする技術(p.112)」であり、即戦力として社会の役に立つ「人材」ではなく、志を持って世界を変える「人間」を育てる教育とされています。これは教養学部で幅広い学問を学ぶ、駒場の学生にも響く言葉ではないでしょうか。この本を読んだ後ではきっと、リベラルアーツ教育に対する向き合い方が変わるはずです。

文責：冨安祥太郎

④デイヴィッド・S・キダー、ノア・D・オ ッペンハイム『1日1ページ、読むだけ で身につく世界の教養365』 小林朋則訳 文響社 2018年

「教養」という言葉に憧れているけど、教養を身につけるために具体的に何から始めればいいのか分からない...というそのあなたにおすすめの本がこちら、『1日1ページ、読むだけで身につく世界の教養365』です！

シリーズ累計100万部という大ヒットで、ニューヨークタイムズベストセラーにも掲載されたため、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。

この本では、歴史、文学、視覚芸術、科学、音楽、哲学と、七分野にわたって、1分程度で読める良質なコラムが書かれています。

知識の幅を広げるもよし、自分の興味がある分野を掘り下げるもよし、活用の仕方はあなた次第！

シリーズものなので今回紹介した巻以外も見かけたらぜひお手にとってみてください、新しい世界との出会いや、特定分野への興味を加速させる何かがあるかもしれません。

文責：吉田葵

いま、震災を考える

歴史的被害をもたらした大災害、関東大震災。

今年、2023年はその発生から100年の節目の年になります。このタイミングに、震災について、そして我々がとるべき行動について、指針となる書籍などをピックアップしました。いざという時の心構え、その指標となることを願っています。

チームClown Fish

本澤龍紀 小柳晶揮 朝香友貴 脇田有弥 高詔太郎 島崎修一 山本昴生

文責 本澤龍紀

関東大震災

関東大震災は今から100年前、1923年9月1日に発生しました。震源位置は神奈川県西部であったものの、有感範囲は北海道から九州であったことから大変大規模な地震といえます。さらに発生時刻が正午近くであり火を使っていた家庭が多く、大火災が発生して多数の死者を出すに至りました。

石井正巳 (2013)

『文豪たちの関東大震災体験記』
小学館

与謝野晶子や平塚らいてう、島崎藤村をはじめとした、名だたる文豪たちがリアルタイムで記し新聞等へ寄稿した関東大震災の体験談を収集・編集した新書です。与謝野晶子が書き溜めていた『源氏物語』の原稿を消失した、などのようなエピソードも紹介されています。

復興

日本は大震災と復興を繰り返してきました。そのたびに蓄積された人々の叡智は、今後発生することが予測される南海トラフ地震や首都直下地震への重要な備えとなるでしょう。

参考

越澤明(2012)『大災害と復旧・復興計画』岩波書店

復興は慎重に行われるべきです。阪神淡路大震災で被災した神戸市の新長田駅南地区では復興に乗じて大規模な再開発が行われました。しかしその地域の消費の実態に合わない投資を行い、結果として300億円以上の赤字を生んでしまいました。

地域の環境や人々に寄り添った復興が求められています。

参考

塩崎賢明(2011)「創造的*復興で2次災厄も 阪神大震災の教訓を生かせ」『エコノミスト』 pp. 42-43.

文責 朝香友貴 脇田有弥

防災

地震の被害をできるだけ抑えるためには地震がどうやって起きるかを理解しておくことが大切です。メカニズムを理解することで適切な防災策を講じることができます。

原慶太郎・菊池慶子・平吹喜彦(2021)『自然と歴史を生かした震災復興』東京大学出版会

防災にも様々な種類があります。海岸に植林することで景観の再生と災害に対するレジリエンスを高めることができます。この本は、このトピックについて扱っています。

参考：高島秀雄(2014)『南海トラフ巨大地震の防災対策 地域防災のランドデザイン』鹿島出版

心理

関東大震災においては、その動乱の最中、様々な悲惨な事件が起きました。

こういった事態を割けるためにも震災の混乱の中、私達は正しい選択を取らなくてはなりません。混乱の中、正しい選択を取るためにはどうすればよいのでしょうか。

参考：金富子(2014) 関東大震災時の「レイピスト神話」と朝鮮人虐殺『大原社会問題研究所雑誌』, p.669.

防災グッズ

震災の予測が難しいとされている今、防災に必要なのは日頃の準備です。ここで大事になってくるのは防災グッズの準備。

特に大事な防災グッズとしては衣類、食料品、携帯ラジオ、懐中電灯などが挙げられます。

皆さん、特に一人暮らしの方、防災グッズを準備していますか。

おそらくそこまで手が回っていないのではないのでしょうか。

また、準備しても震災時持っていなければ意味がないと思う方もいるでしょう。

関谷直也(2021)

『災害情報：東日本大震災からの教訓』
東京大学出版会

東京大学情報学環総合防災情報研究センターの関谷准教授による著書で、避難などについてや、情報の扱い方、認知バイアスなど幅広く言及されています。

文責 本澤龍紀

そこで、ここでは日常でも使える便利な防災グッズを紹介しようと思います。

①空気で膨らむLEDソーラーライト「エムパワード」

普段は折りたたまれています、必要となった時は空気で膨らみスマホに繋ぐだけで強く発光します。

②手袋シャンプー

シャンプーが使えない時に、水を使わずしっかり拭ける手袋型ドライシャンプーシート。

③ファイル型ヘルメット

普段は普通にA4サイズのファイルとして使えますが、地震時にはヘルメットへと変化します。

芸術、文化の化学反応

近年、インターネット等の爆発的な普及によって日本と海外との距離が縮まった。所謂グローバル化によって日本の文化と海外の文化は相互に交流しあい、文化の融合が目まぐるしく起こっている。特に、アニメ・マンガや絵画など芸術の分野についてはその広がりが顕著だ。今や日本のアニメやマンガは海外で人気であるし、海外の絵画が日本の絵画に影響を与えている事も多い。

今回は日本のアニメやマンガの海外進出についての本や海外の文化の国内輸入等についての本を数冊紹介する。身近な文化が海外でどのように受け入れられているか、また身近な文化がどのように醸成されたか実感する一助になる事を願う。(吉川)

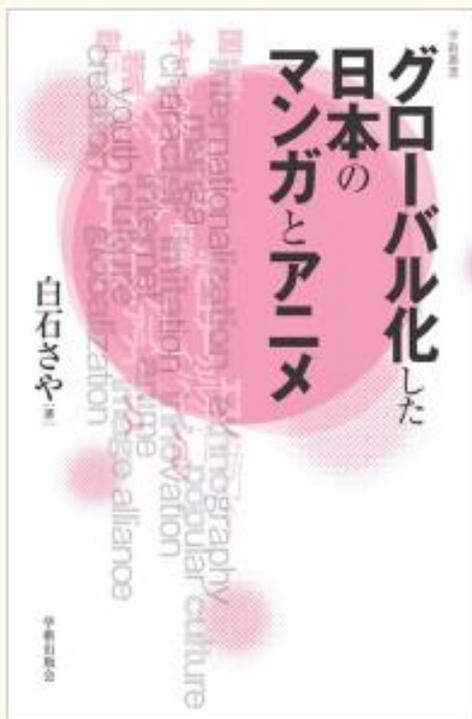
チーム たけのこ

角岡由梨 木村航成 楠本侑久 清水優里恵

忠垣希佳 吉川友梧 吉田聖悟

グローバル化した日本のマンガとアニメ

白石さや著 学術出版会 (2013)



日本のアニメ・マンガが世界に広がって行くという現象を多様な面から捉える際におすすめの書籍である。例えばアニメやマンガといった大衆文化は「ソフト・パワー(=国の持つ文化や政治的な価値観、魅力などによって生み出される、自国が望む結果を他国も同じように望むようにする力)」を生み出す源泉になる可能性があり、異国同士の大衆文化の相互交流により「緩やかな文化共同体」の創造が期待される。簡単に言ってしまうと、文化を広めることで他国に親近感を湧かせて外交を有利に進められるということである。しかし、筆者はそういった手段や目的として大衆文化が利用されることに対しては何度も「それで良いのか？」と疑問を呈しており、私たちが日本の文化を海外に発信する際にはその影響を考えるべきである。

韓国や中国など海外の大衆文化に無意識下で日常的に触れている今、是非参考にしたい一冊である。(清水)

アメリカに日本のマンガを輸出する：ポップカルチャーのグローバル・マーケティング

松井剛著 有斐閣 (2019)

芸術・文化の化学反応ということで、マンガという日本の文化の一つが全く異なる文化圏である海外に進出する際に起きた変化について扱った本を紹介する。

近年、日本のマンガが海外でも読まれるようになってきている。しかし文化によって何が面白い、楽しいと感じるかは大きく異なるはずで、日本で人気がある作品が海外でも人気があるとは限らない。

日本の文化を背景に生まれたマンガが海外で普及するのも一筋縄ではいかなかった。日本のマンガで多用されるオノマトペなどは直訳が難しく、そもそもページをめくる方向も異なる。形式的な話だけでなく、日本とアメリカではマンガというものに対する考え方の違いがあった。日本では幅広い年齢層にマンガが読まれているが、アメリカのコミックはスーパーヒーローものが多く、子供向けという印象がある。そのため、日本のマンガも当初は子供向けだと思われた。また、日本のマンガではよくみられる性表現や暴力表現もアメリカでは受け入れられなかった。キャラクターの飲酒や喫煙などは出版の際に内容を一部修正する必要がある。しかし、大胆な内容修正がファンの怒りを買って不買運動につながった作品もあり、日本の漫画を海外に輸出する際には原作の良さを活かしつつ、海外の文化でも受け入れられるようにする工夫が必要だ。

ぜひこの本を読んで、マンガやアニメなどのコンテンツ産業が海外進出する際に何が必要かを考えてほしい。(木村)

アニメの輪郭：主題・作家・手法をめぐる

藤津亮太著 青土社 (2021)

「そこになにが描かれていたかー時代・主題をめぐる」、「それは誰が描いたものなのかー監督・演出をめぐる」、「それはどのように描かれたものなのかーアニメ・マンガ・実写の界面をめぐる」といった三つの視点から“アニメの輪郭”に迫る本書は、ディズニー作品から『エヴァンゲリオン』、『進撃の巨人』、『スター☆トゥインクルプリキュア』まで幅広い作品を取り上げ、数多くの章から構成されている。その中でも私が本書を選んだ理由となる章を紹介する。私はつい先日、『少女革命ウテナ』を最終話まで見終えたばかりだが、これを読んでまた最初から見返したくなった。

「社会派」としての幾原邦彦ー『輪るピングドラム』『ベルサイユのばら』『少女革命ウテナ』『ユリ熊嵐』

幾原の「ものの見方」を表す言葉として“運動”がある。直接的には六〇年安保、七〇年安保をめぐる学生運動の盛り上がりを目指す、この場合は「事象」についての呼び名というよりも、その頃の時代精神を表している。そして、“運動”が終わった後に何を語るべきかという問題意識が幾原の中で非常に大きな意味がある。政治における“運動”があり、その終焉が投影されたカルチャーが生まれ、そのカルチャーが種となって歪んだ別の“運動”を生むことになる連鎖といったダイナミズムとして過去の歴史を受け止めていることへ自覚的なのだ。幾原の作品が、様式的なビジュアルでありながら生っぽいのは、作品の背景に“運動”というキーワードを通じて社会との関係が織り込まれているからだ。(忠垣)

ハルヒ in USA 日本アニメ国際化の研究

三浦龍太郎著 NTT出版 (2015)



米国をはじめとする世界の国々で、アニメが日本について語る際の主要なトピックとなっている今日において、本書はかの有名なアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」を例に挙げて国外のマーケットでアニメがどのように現地化・消費されているかについて語っている。現地化の例として、「ハルヒ」は日本の高校学園ラブコメディという面の他に水面下にはSFの面も合わせ持っているのだが、北米の放送では「オタク」でない一般人たちにも理解しやすいようにラブコメディの面を強調された。これは一例に過ぎないが、本書はいかにアニメが外部にある様々な要素のサンプリングによって作られているかを露わにしておき、文化的な文脈によって同じアニメでも全く違うものとなり得ると述べている。

また、筆者によると、北米におけるアニメの普及とともにアニメの研究も進んでいる。北米ではアニメの物語テキストやその芸術的価値観に殊更に注目するような、日本国内のものとはまた違ったアプローチでアニメを理解しようとする動きがあり、日本のアニメが国外に出ることとアニメ研究の分野が広がりアニメをより多角的な視点で見ることも可能になった。これも文化の化学反応の一種と言えるのではないだろうか。日本のアニメが国境を越えることで様々な変化の可能性について述べられた本書は、昨今のアニメブームを理解するのにもよい書籍ではないかと思う。(角岡)

ジャパニーズ・ポップカルチャーのマーケティング戦略

川又啓子、三浦俊彦、田嶋規雄著 千倉書房 (2022)



まず初めに、題名の印象からして「いかに出版社などの企業が海外戦略に取り組んでいるか」といったような細かい内容であることを想像されるかもしれないが、本書はそういった内容を扱っているわけではない。軽い内容の「日本の漫画やアニメの歴史解説」に始まり、「聖地巡礼に関して自治体に取り組むべき課題」や「企業/プラットフォームがファンの交流に際して何を果たしていくべきか」といったような少し深い内容まで掘り下げていくというものになっている。

今、海外の方がアニメやマンガを通じて日本に旅行に来る、別の形では聖地巡礼としてやってくる、あるいはコスプレの場実際にコスプレをしてやってくるといった事例がたくさんある。そのようなことに関して、地方自治体はこのままの経営戦略・広告戦略で良いのだろうかといったようなことをこの本では、過去の事例から考えていく部分が多く含まれていて非常に面白い。

アニメ関連のマーケティングの話題に関して、ひとまずさらっと知りたい方にお勧めしたい。(楠本)



若年層の言語習得

チーム 多様性

天野、井上、笠原、中島、二宮、日影、平井

東京大学の学生は、文系理系問わず第二外国語を履修することを課せられています。しかし、18歳以降に新たな言語を習得しようと試みることに本当に科学的な意義があるのでしょうか。

そこで我々は、若年層の言語習得に関する文献を駒場図書館で探し、その答えに近づこうと試みました。

天野・平井



ヘレン・ケラーの言語習得

米山三明 著 2020年

奇跡と生得性

開拓社

目と耳が不自由で、そのうえ言語を含む教育が始まったのが6歳8ヶ月になってからという状況で、普通あるいは普通以上の英語の技能を獲得したヘレン・ケラー。本書は、そんな彼女の奇跡とも呼べる言語習得を分析し、言語（とりわけ英語）の習得について考察をまとめたものです。

本書は、ヘレン・ケラーが実際に綴った英語に触れながら、20歳までの彼女の英語学習について、詳しく説明しています。そのうえで、彼女の言語習得について言語学的視点から考察し、また、彼女の英語について文法的解説をしています。

本書は、英語学習について新たな視点から考えるきっかけとなる興味深い内容となっています。ぜひ手に取ってみてください。

日影



ヘレン・ケラーの言語習得

奇跡と生得性

米山三明 著



開拓社





子供は言語をどう獲得するのか

スーザン・H・フォスター＝コーエン 著 今井邦彦 訳 2001年 岩波書店

外国語を習得するにあたって、自分はいかにして母語を習得したのか、また、同じように外国語を習得することはできないのだろうか、と悩んだ人も少なからずいるのではないのでしょうか。

そのような疑問に答えてくれるのがこの一冊であり、赤ん坊の言語習得のメカニズムを、課題を交えながら詳しく説明しています。

また、読者に対して、討議題目や研究活動、読書案内と称して、本書の内容をより深く理解するヒントも提示されており、言語獲得について深掘りしてみたい人にもおすすめの一冊です。

ぜひ手に取ってみてください。

井上



ことばの習得 母語獲得と第二言語習得

鈴木孝明・白畑知彦 著 2012年 くろしお出版

子どもはどうやって文法を覚えるのか？ 最初に覚える単語は何か？ 本書に紹介されている研究は、こういった問いに答えることを切り口に、子どもの母語獲得の仕組みに迫っています。紹介されている研究は多岐にわたりますが、日本語話者に関する研究も多くわかりやすい内容です。

また第二言語の習得についても、母語獲得との比較を交えながら、さまざまな理論・実験が紹介されています。

ヒトの言語習得の仕組みについて興味がある人のための入門書としても、これから新しく外国語を学ぶ人にとってのヒントとしても本書がおすすめです。

笠原





第二言語習得研究への誘い：理論から実証へ

吉村紀子・中山峰治 著 2018年 くろしお出版

中学生、あるいは小学生の頃から英語を学び、大学に入ればドイツ語やフランス語などの第二外国語を学ぶのが当たり前となった現在、母語とのルールの違いが習得を妨げることがよくあります。

例えば、英語を話すとき「三人称単数の-sを書き忘れた！」なんて経験はありませんか？

このようなミスは「日本語から英語に遷移するときに我々が作り出す文法（中間文法）に起きるミス」というより、「それを発話するときにおけるミス」であることがさまざまな研究により示されている、とするのがこの本の主張です。

このようにさまざまな研究を踏まえた本書は言語習得や指導においてきっと良い結果をもたらしてくれるでしょう。

中島



言語の習得

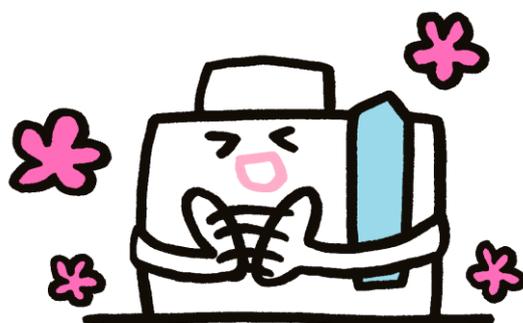
大瀧綾乃・中川右也・若林茂則 編 2023年 くろしお出版

あなたは、英語の教科書などで“Japanese people eat lice.”(日本人はしらみを食べる。)のような例文を見かけたことはありませんか？lとrの区別の重要性を示すものですが、実際の会話や文章には文脈というものがありこうしたミスが意思疎通を妨げることはありません。本書は、英語に注目しながら、こうした外国語教育の過不足を指摘していきます。上記のような単音のミスよりも、アクセントやイントネーションといった発音の流れ(プロソディー)の方が重要だと指摘するのです。

本書はその他の様々な事項についても、多くの日本人学習者がつまずく要素を実験によって明らかにしており、10章構成でそれらをまとめています。日本の英語教育に興味がある、もしくは現在英語を勉強している、というそのあなたにオススメの一冊です。

二宮





駒場図書館公式キャラクター
「こまとちゃん」

東京大学教養学部 主題科目 全学自由研究ゼミナール
こまとちゃんゼミナール
～駒場図書館で学ぶ大学生の為の情報検索・収集・発信スキル
2023年度Sセメスター 成果発表冊子

著者 梅田一真、坂本優月、富安祥太郎、畑中愛梨、藤井悠貴、
黛晴子、吉田葵、吉田美涼、本澤龍紀、小柳晶揮、
朝香友貴、脇田有弥、高詔太郎、島崎修一、山本昂生、
角岡由梨、木村航成、楠本侑久、清水優里恵、忠垣希佳、
吉川友梧、吉田聖悟、天野志洋、井上若名、笠原健太郎、
中島寛太、二宮 行、日影拓真、平井啓斗、

編者 山上揚平

発行日 2023年8月14日
発行 東京大学教養学部 主題科目 全学自由研究ゼミナール
「こまとちゃんゼミナール」

発行所 〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 101号館12室
東京大学教養学部附属教養教育高度化機構社会連携部門
TEL 03-5465-8820 FAX 03-5465-8821

